

西行

(1118～1190)

西行は俗名を佐藤義清といい、京の都にあつて代々宮中警護などを務める武勇の家に生まれました。承平・天慶の乱で功績を挙げた藤原秀郷を祖先にもち、奥州藤原氏とも縁続きでした。

義清は保延元年(1135)、朝廷の親衛組織である兵衛府の官僚に任ぜられた後、上皇の御所の北面に控え、警護にあたる北面の武士として鳥羽上皇に仕え、さらに和歌、流鏑馬、蹴鞠などに多彩な才能を発揮しました。

ところが保延6年(1140)、23歳の若さで出家してしまいます。親友の急死に遭い、無常を感じたのが動機となったという『西行物語』の説が主流ですが、『源平盛衰記』には、ある高貴な女性に対する失恋によるものとあります。

出家後数年は嵯峨野や東山に草庵を結んで仏道に励み、吉野(奈良県)で山伏修行をしたとも伝えられています。そのかたわら、諸国を巡り、数多くの優れた和歌を残しました。

西行は生涯に2度、陸奥国を訪れています。最初は30歳前後で、みちのくの歌枕に憧れ、藤原実方や能因の足跡を慕つての旅と考えられています。2度目は晩年、文治2年(1186)のことで、源平合戦の際、平重衡によって焼き討ちされた東大寺復興の

ため、奥州藤原氏に対して砂金の提供を依頼するという使命を担つてのことでした。

平泉への途中、鎌倉に立ち寄つた西行は、源頼朝と面会しています。その際、頼朝の求めに応じて兵法について語り、終夜に及んだと言われています。翌日、引き留められながらも平泉へ向かつて旅立つ西行に、頼朝は銀作りの猫を贈りましたが、それを門前で遊ぶ子供に与えてしまつたというエピソードが『吾妻鏡』に残されています。

西行自身が選んだとも言われている歌集『山家集』には、壺碑、おもわくの橋を詠み込んだ

むつのくの おくゆかしくそ おもほゆる
つほのいしふみ そとのはまかせ
ふままうき もみじのにしき らりしきて
人もかよわぬ おもはくの橋

の歌が収められており、西行と陸奥国とのかわりを示しています。

西行の生き方が与えた影響の深さは宗祇や芭蕉といった中世・近世の文学者に及び、さらに全国に残る西行ゆかりの地によつても窺つことができます。



おもわくの橋

西行の歌にちなむ橋で、別名「安倍の待橋」とも呼ばれます。これは、前九年の役で有名な安倍貞任が、おもわくという名の娘に思いを寄せ、この橋を渡つて通つたことからついた名前だといひ伝えがあります。



市内野田の玉川にかかる「おもわくの橋」は、西行の歌にちなみ、仙台藩によつて整備された歌枕で、今も西行を偲ぶよすがとして、多くの人々に親しまれています。

源頼朝

(1147～1199)

みなものよりとも

鎌倉幕府を開いた源頼朝は、源義朝の三男として生まれ、正室の子であったため源氏の跡継ぎとして育てられました。

平治元年(1159)、父義朝は平清盛の能野詣の隙をついて挙兵しますが、清盛の反撃に遭い敗れます(平治の乱)。この戦いが初陣であった頼朝は、東国へ逃げる途中、父とはぐれ平氏方に捕らわれます。源氏の跡継ぎであったことから当然殺される運命に



阿津賀志山防壘
阿津賀志山防壘は福島県伊達郡国見町にあり、二重の堀と三重の土塁で形成されています。源頼朝の軍勢を迎え撃つため、平泉方が築いたものと考えられています。写真中央の高まりが土塁。

ありましたが、当時13歳の幼い頼朝を見た池禪尼(平清盛の義母)が哀れに思い懇願したため、伊豆の蛭ヶ小島に流されました。

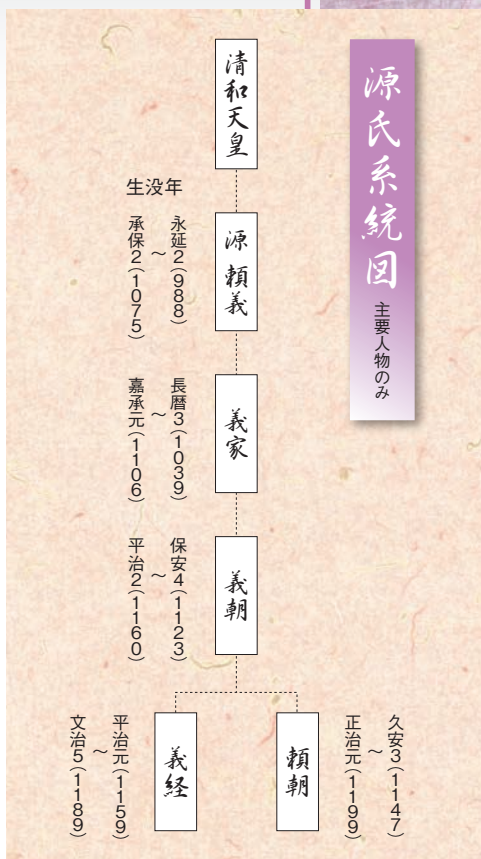
治承4年(1180)、以仁王

と源頼政が平氏打倒に立ち上がると、頼朝も北条時政の援助を受けて挙兵します。しかし、石橋山の戦いで敗れ、一時安房国(千葉県)に逃れましたが、平氏に対し不満を抱いていた東国武士が次々に頼朝のもとに参集し、富士川の戦いにおいて平氏を破ります。寿永2年(1183)、源義朝(木曾義仲)が平氏を追って都に入ると、翌年義仲が後白河法皇を襲撃したため、源義経らを派遣して義仲を近江(滋賀県)において破り、文治元年(1185)には平氏を壇ノ浦に追いつめ滅亡させました。

しかし、平氏との戦いにおいてめざましい活躍をした義経を、頼朝の推挙なしに朝廷が任官し、義経もそれを受けたことから頼朝の怒りに触れ、頼朝は義経を討つ決意をします。義経は反抗を試みますが、思うように兵が集まらず、平泉の藤原秀衡のもとに逃れます。文治5年(1189)、秀衡が亡くなると、その子泰衡は頼朝の圧力に耐えきれず、つい

源氏系統図

主要人物のみ



に義経を自害へと追いやります。

頼朝は泰衡が義経をかくまっていたことを責め、自ら陣頭に立ち、全国の武士を大動員して奥州藤原氏を攻め滅ぼしました。この戦いは、頼朝の先祖源頼義が活躍した前九年の役の実に基づいて行われ、頼朝はこの奥州合戦の際に、多賀国府にも立ち寄っています。また、鎌倉への帰路多賀国府において、陸奥国内のことについては、秀衡・泰衡の先例に従って取り扱うようにとの張紙をばらせています。

建久3年(1192)、頼朝は征夷大將軍に任じられ、名実ともに武家政権の創始者としての立場を確固たるものになりましたが、建久10年(1199)、落馬が原因で亡くなったと歴史書は伝えています。

『新古今和歌集』には、壺碑を詠んだ次の歌が収められています。

みらのくの いはで忍ぶは えぞしらぬ
かきつくしてよ つばのいしぶみ

北畠 顕家

(1318)~(1338)

南北朝時代、南朝の武将として活躍した北畠顕家は、『神皇正統記』の著者として知られる北畠親房の長男として文保2年(1318)に生まれました。

父親房が天皇の側近であったことから幼少の頃より着実に昇進し、元弘元年(1331)、わずか14歳にして国政を司る参議に昇任するという、異例の出世を遂げます。

元弘3年(1333)鎌倉幕府が滅亡すると、後醍醐天皇による建武の新政の下、顕家は陸奥守に任ぜられ、後醍醐天皇の皇子である義良親王(のちの後村上天皇)を奉じ、父親房らとともに陸奥国府へと

赴き、東北地方経営を始めます。

建武2年(1335)鎮守府將軍に任ぜられると、足利尊氏が後醍醐天皇に反旗を翻し京都へ進入したため、顕家は留守氏や八幡氏といった奥州の兵を引き連れ陸奥国を発ち、新田義貞、楠木正成らの軍と協力して京都を奪還、尊氏を九州へと敗走させました。

しかし、顕家が不在の奥州では、足利方が活発に活動を起こしていたため、陸奥国への帰還を余儀なくされます。



北畠顕家像

霊山神社にあるブロンズの像です。神社は福島県伊達市霊山町にあり、北畠親房・顕家親子、並びに顕家の弟顕信とその子守親を祀っています。

尊氏が勢力を盛り返すと、足利方の攻撃が激しくなり戦局は悪化、伊達氏を頼り伊達郡霊山(福島県伊達市)へと拠点を移すものの、後醍醐天皇の再三の要請により、再び京都へ軍を進めます。延元3年/建武



「後村上天皇御坐之處」碑

多賀城跡内にあり、昭和10年4月13日に建立されました。碑文は第30代内閣総理大臣齋藤實によるものです。

5年(1338)、美濃国(岐阜県)において足利方に勝利し、京都を目前にしますが、決戦を避け、奈良などを中心に一進一退の攻防を繰り返します。このような中、顕家は後醍醐天皇の政治体制にかなり不満をもっていたようで、これを諫める意見書を天皇にあてています。意見書には「京都のみ重要視するのをやめること、諸国の租税を免じ儉約すること、官位を慎重に与えること、恩賞は公平にすること」などが記され、これらが聞き入れられない時は、後醍醐天皇のもとを離れ、山中にこもると結んでいます。

しかし、この意見書を出した7日後、顕家は和泉国石津(大阪府堺市)で高師直の軍と戦い戦死、まだ21歳という若さでした。

伊達安芸宗重 (1615~1671)

伊達安芸宗重は、仙台藩の一門である涌谷領主伊達定宗の子として生まれました。二男であったため、寛永2年(1625)宮城郡八幡の領主で仙台藩の準一家であった天童家の2代重頼の娘婿となり、家督を継いで頼長と名乗ります。しかし寛永16年(1639)、涌谷伊達家を継いでいた兄の宗実が急

死したことから実家に呼び戻されました。この時、妻である天童氏の娘(長巖院)も一緒に涌谷に移っています。その後慶安4年(1651)、父定宗の隠居により家督を相続して涌谷伊達家を継ぎ、伊達安芸宗重を名乗りました。

幕府により突然隠居を命じられ、わずか2歳の嫡男万治3年(1660)、仙台藩3代藩主伊達綱宗が、



伊達安芸宗重木像

涌谷伊達家の菩提寺見龍寺にある見龍院霊屋にあります。束帯姿のこの像は、嫡子宗元によって江戸で制作され、安芸の27回忌にあたる元禄11年(1698)、見龍院に安置されました。

亀千代が4代藩主の座につきます。そして、伊達兵部宗勝(綱宗の叔父)と田村右京宗良(綱宗の兄)の2名が幼い藩主の後見人となりましたが、伊達兵部が奉行原田甲斐宗輔らと結び藩政を主導、次第に実権を握るようになり、それに対して、伊達安芸をはじめとした藩内の有力者は、兵部との対立を深めていきます。

一方、涌谷に戻った宗重は、領内の野谷地を開墾し新田開発に取り組みますが、同様に野谷地開発を進めていた一門の登米領主伊達式部宗倫との間に、寛文5年(1665)以来、境界争いが続いています。藩に裁断を委ねますが、納得のいく回答が得られず、また、かねて伊達兵部の独裁に危機感を抱いていたことも相俟って、ついに寛文10年(1670)、兵部の悪政を告発し、藩政の

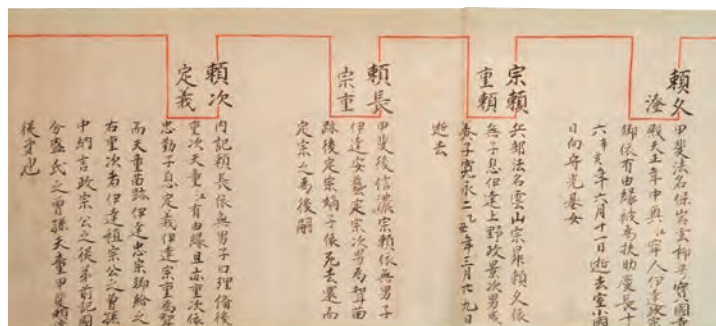
粛正を図るため、幕府に対して訴状を提出しました。

寛文11年3月、審理のため宗重をはじめ柴田外記朝意、原田甲斐宗輔、古内志摩義如が大老酒井忠清邸に召喚されます。審問が終わった後、突然原田宗輔によって斬り付けられ、宗重はその場で命を落としました。天童家当主としての宗重の事績について



加瀬沼

ては明らかではありませんが、もともと宮城郡市川村と加瀬村の境にあった小さな沼に万治年間(1658~1661)堤を築き、現在のような周囲4kmの加瀬沼に改修したと伝えられています。この沼から引かれた用水は、今でも市川や八幡の水田を潤しています。



天童家系図

徳川光圀

(1628～1700)

水戸黄門の名で知られる徳川光圀は、寛永5年(1628)、水戸城下にある水戸藩の家臣三木之次の屋敷で生まれました。父頼房は徳川家康の十一男で、徳川御三家の一つ、水戸徳川家の初代藩主でした。

6歳のとき、兄の頼重を越えて水戸藩の跡継ぎに決まり、江戸小石川の藩邸に移ります。そして寛永13年、將軍家光の命により江戸城で元服の式をあげ、家光の一字を与えられて光圀と名乗ることになりました。「光圀」に改めるのは、50代半ばになってからです。

17歳までは非行が多く、父頼房や家臣を心配させましたが、18歳の時、中国前漢の時代に歴史家司馬遷が著した『史記』に大変な感銘を受け、それまでの生活態度を深く反省し、学問を志すようになりまし

た。さらに『史記』を読んだことで歴史書の重要性を認識し、これが『大日本史』編纂のきっかけとなりました。また、文化財保護にも取り組み、藩内外の由緒ある神社仏閣の保護・復興に努め、仏像や古碑などの修理にも尽力しました。

天和3年(1683)、領内巡見中に下野国湯津上村(栃木県大田原市)にある那須国造碑の存在を知ります。この碑は長く草むらの中に忘れ去られていましたが、延宝4年(1676)、水戸藩領であった下野国馬頭村の名主大金重貞によって確認されたばかりでした。光圀は碑の

重要さをかんがみ、碑堂を建設し、管理人を

置き、碑の保存顕彰に力を尽くしました。それから間もなく、大日本史編纂にあたって史料調査を行っていた丸山可澄から、多賀城碑が苔むした状態であることを聞き及んだ光圀は、仙台藩4代藩主伊達綱村に対し、碑の覆屋を建ててはどうかという内容の書簡を送りました。これがきつ



那須国造碑

栃木県大田原市湯津上にあり、現在笠石神社の御神体として祀られています。文武天皇4年(700)に死去した那須国造である那須直章提の業績を称え、その地位を子が受け継いだことが記されています。



多賀城碑

かけとなり、現在みるような覆屋が造られたと考えられています。多賀城碑の保護に果たした光圀の役割は、大変大きなものであったと言えます。

34歳で2代藩主の座についてから63歳で隠居するまで、上水道の敷設をはじめとした水戸の城下町整備に大きな力を発揮する一方、文化事業を推し進め、特に文化財の保護に心を砕いたことは、今日的意義が大きいと評価されています。



徳川光圀肖像画(茨城県立歴史館提供)

水戸出身で江戸時代後期の南画家、立原杏所が描いたもの。

松尾芭蕉 (1644~1694)

「俳聖」「漂泊の詩人」などと呼ばれた松尾芭蕉は、正保元年(1644)、伊賀国上野(三重県伊賀市)に6人兄弟の二男として生まれました。

若くして伊賀上野藩の侍大将藤堂良清の嫡男良忠(俳号は蟬吟)に仕え、良忠とともに北村季吟に師事して俳諧の道に入りました。寛文6年(1666)に良忠が25歳の若さで没すると、芭蕉は仕官を退きます。

寛文12年(1672)、初めての句集を上野天満宮に奉納した後、俳諧を職業とするべく、江戸へと活動の舞台を移します。

天和2年(1682)、江戸で起きた大火で、深川に構えた草庵(芭蕉庵)が焼失、この時芭蕉に一箇所にどまらないという心が生まれたと言われています。

その後、芭蕉は旅を繰り返し返し、元禄2年(1689)、弟子の河合曾良を伴って、「おくのほそ

道」の旅に出ます。3月28日(旧暦)、江戸の深川を出発した芭蕉は、歴史に彩られた名所・旧跡・歌枕などをたずねながら、5月8日、多賀城に到着します。多賀城では壺碑(多賀城碑)、野田の玉川、沖の石、末の松山を見て回り、壺碑を見た芭蕉は、「これまで見てきた歌枕や旧跡はかつての姿を失っているものが多かったが、この碑だけは昔のままであり、苦勞の多かった旅のことなども忘れ、涙が出るばかりだ」と感動した様子が紀行文『おくのほそ道』に記されています。

また、末の松山においては、恋愛模様に関われた末の松山と、その眼前にある墓地をみて、この世の無常を感じたことも書き留められています。

旅を終えた芭蕉は、江戸にとどまることなく、多賀城を訪れた5年後の元禄7年(1694)、大阪において

旅に病んで 夢は枯野と かけ廻る

という句を残し、51歳でこの世を去りました。その亡骸は「木曾義仲の墓の隣に」という遺言によって、近江の義仲寺(滋賀県大津市)に葬られました。

芭蕉は多賀城において句を詠んでいませんが、壺碑の傍には、芭蕉が来たことを顕彰して、仙台市の



芭蕉翁礼賛碑

昭和2年(1927)、鈴木源郎以下7名により建てられました。



義仲寺
滋賀県大津市にある寺院で、名称は、木曾義仲をここに葬ったことに由来しています。



芭蕉翁絵詞伝(義仲寺蔵)
江戸時代中期の僧・俳人である蝶夢が、芭蕉の百回忌を翌年に控えた寛政4年(1792)に義仲寺に奉納したもの。詞は蝶夢、絵は狩野正栄至信の手になるものです。

木下薬師堂で詠まれた

あやめ草 足に結ん 草鞋の緒

と刻まれた碑が地元の俳人たちによって建てられています。

伊達吉村

(1680~1751)

仙台藩5代藩主伊達吉村は、延宝8年(1680)、黒川郡宮床領主伊達肥前宗房の長子として生まれました。仙台藩4代藩主綱村の長男が早世したため、元禄8年(1695)綱村の養子となり、翌年江戸城で元服、將軍綱吉の一字を与えられ、それまでの村房を吉村と改めます。そして元禄16年(1703)、仙台藩にとって初めて、直系ではなく、一門出身の藩主となりました。

この頃、初代藩主政宗の時代から困窮していた仙台藩の財政は、一層苦しくなっていました。そこで吉村は財政再建のため藩政全般にわたる改革にとりかかりましたが、建て直しは容易ではなく、しばしば藩内においても一門が抵抗するなど対立を招きました。紆余曲折の後、吉村は幕府に鑄銭事業を願い出ま

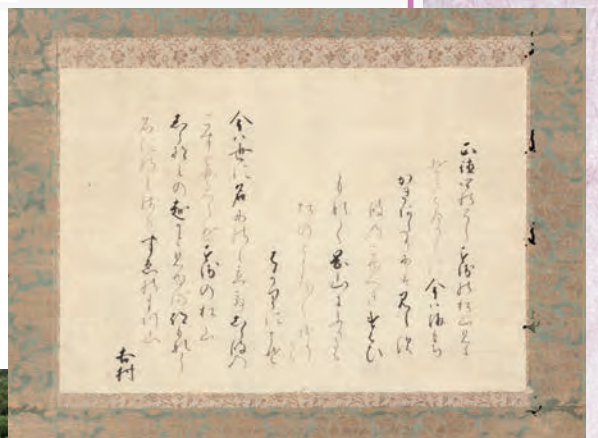
す。これは前藩主綱村の時にも申し入れ、取り下げられていましたが、仙台藩領内産の銅で鑄造することを条件に許可を得て、享保13年(1728)、石巻で寛永通宝の鑄造が始まりました。さらに、藩財政の建て直しに最も貢献したのが、買米仕法です。これは、農民や藩士の余剰米を、藩が前もって独占的に買上げ江戸で売りさばき、利潤を得るといふものです。仙台藩はもともと米を最重要商品としていましたが、これにより江戸へ送る米は一気に増加しました。しかも享保17年(1732)、西日本で起きた飢饉等により江戸の米価が高騰したため、約50万両という莫大な利益を上げ、ようやく財政難を克服することができました。

一方吉村は歌人としても名高く、歴代藩主の中でも最も和歌に造詣が深いと言われています。正徳4年(1714)12月には、宮城郡八幡の領主天童氏宅に逗留し、その折に末の松山をたずね



伊達吉村肖像画(仙台市博物館蔵)
吉村自身の筆になる自画像です。

今ハ世に 名にのミ立て しら波の
こすとも見えぬ す糸の松山
しらなみの 越かと思ゆる 跡もなぐ
名にのミ残る す糸の松山



伊達吉村和歌

という歌を残しています。

書や絵画にも秀で、さらには子弟教育のため学問所を開設するなど、学芸の奨励にも努めました。このよう

に広く藩政全体にわたり安定と繁栄をもたらしたことから、後世「御中興の英主」と称されました。

歴代藩主中最も長い40年の治世後、江戸大崎屋敷(品川区五反田)で宝暦元年(1751)、72歳の生涯を終えました。その亡骸は、綱村が建立した仙台市根岸の大年寺に葬られています。



大年寺惣門

大年寺は仙台藩4代藩主伊達綱村が創建した黄檗宗の寺院です。かつては5万坪の広さを誇る壮大な寺院でしたが、当時の遺構として残っているのは、吉村が造営したこの惣門のみです。

古今往来 関連年表

時代	西 暦	和 暦	主 な で き ごと
奈良	710	和銅3	平城京に都をうつす
	724	神亀1	多賀城がつくられる(多賀城碑による)
	737	天平9	大野東人、陸奥国から出羽柵に至る直路を開こうとする。多賀柵の初見
	749	天平感宝1	陸奥守百濟王敬福、小田郡(宮城県涌谷町)で産出した金を献上する
	752	天平勝宝4	東大寺大仏開眼
	759	天平宝字3	桃生城・雄勝城完成
	762	天平宝字6	多賀城碑建立。多賀城碑によれば、この年藤原朝鴉が多賀城を修造する
	774	宝亀5	海道の蝦夷が桃生城を襲う。以後38年にわたり、中央政府側と蝦夷との間で戦いが続く
	780	宝亀11	伊治公咎麻呂が多賀城を襲い、火を放つ
	782	延暦1	大伴家持、陸奥按察使・鎮守将軍となる
	785	延暦4	大伴家持死去
平安	794	延暦13	平安京に都をうつす
	797	延暦16	坂上田村麻呂、征夷大將軍に任命される
	800頃		この頃、宮城県北及び岩手県南で激しかった中央政府側と蝦夷との戦いが終息する
	802	延暦21	坂上田村麻呂、胆沢城をつくり、多賀城から鎮守府をうつす
	839	承和6	この年の記事を最後に、「多賀城」の名が記録から見えなくなる
	864	貞観6	源融、陸奥出羽按察使に任命される
	869	貞観11	陸奥国大地震、城下に津波が押し寄せる
	11世紀中頃		この頃以降、それまでの多賀城は維持されなくなる
	1051	永承6	源頼義、陸奥守となる。前九年の役(～1062)
	1083	永保3	源義家、陸奥守となる。後三年の役(～1087)
	1186	文治2	西行、再び陸奥国を訪れる
1189	文治5	平泉藤原氏滅亡	
鎌倉・室町	1192	建久3	源頼朝、征夷大將軍となる
	1333	元弘3/正慶2	北畠顕家、陸奥守となり、義良親王を奉じ陸奥国府に赴く
	1337	延元2/建武4	北畠顕家、陸奥国府を放棄し、靈山に移る
	1339	延元4/暦応2	後醍醐天皇が死去し、義良親王、後村上天皇となる
安土桃山	1573	天正1	室町幕府滅びる
	1590	天正18	八幡氏、留守氏の所替えに従い、八幡を去る
江戸	1600	慶長5	関が原の戦い
	1603	慶長8	徳川家康、江戸幕府をひらく。仙台城がほぼ完成し、伊達政宗入城。
	1625	寛永2	伊達安芸宗重、天童重頼の娘婿となり天童家の家督を継いで、頼長と名乗る
	1639	寛永16	天童頼長、涌谷伊達家に戻る
	1671	寛文11	伊達安芸宗重、江戸酒井邸において原田甲斐宗輔の刃傷により落命
	1689	元禄2	松尾芭蕉、「おくのほそ道」の旅で壺碑、末の松山などを見る
	1694	元禄7	この頃徳川光圀、仙台藩主伊達綱村に書簡を送り、多賀城碑の覆屋建設を勧める
	1703	元禄16	伊達吉村、仙台藩5代藩主となる
明治・大正	1773	安永3	多賀城市域の諸村、風土記御用書出提出
	1868	明治1	戊辰戦争が終わり、明治と改元
	1889	明治22	多賀城村ができ、役場を市川の玉川寺に置く
	1893	明治26	正岡子規、与謝野鉄幹、多賀城を訪れる
昭和・平成	1922	大正11	多賀城跡が多賀城廃寺跡とともに史跡に指定される
	1943	昭和18	多賀城海軍工廠開庁
	1945	昭和20	第二次世界大戦終結
	1951	昭和26	町制施行
	1960	昭和35	多賀城跡の発掘調査事業が開始される
	1961	昭和36	東北大学伊東信雄教授を団長として、多賀城廃寺跡の発掘調査が開始される
	1966	昭和41	多賀城跡・多賀城廃寺跡が特別史跡に指定される
	1971	昭和46	市制施行
	1980	昭和55	館前遺跡、特別史跡に追加指定
	1990	平成2	柏木遺跡、特別史跡に追加指定
	1993	平成5	山王遺跡千刈田地区、特別史跡に追加指定
	1998	平成10	多賀城碑、国の重要文化財(古文書)に指定
	2010	平成22	多賀城跡発掘調査50周年。平城遷都1300年
2024		多賀城創建1300年	

編集：多賀城市教育委員会 〒985-8531 宮城県多賀城市中央二丁目1-1 TEL 022-368-1141 FAX 022-309-2460

発行：多賀城市文化遺産活用活性化実行委員会

平成25年度文化庁 文化遺産を活かした地域活性化事業



古紙パルプ配合率70%再生紙を使用



この印刷物は、環境にやさしい「水なし印刷」と「植物油インキ」を使用しています。

